

アルパック ニュースレター



戒橋(大阪市)から見た夜景(本文中に関連記事があります)

アルパック ニュースレター もくじ

1995年11月1日

- 『農のあるまちづくり』を求めて 2
- ヨーロッパの産業活性化と大学・行政・企業事情 5
- 世界夜景会議に参加して 7
- ふるさとの味はほろにがさ? 8
- 天王寺に新しい“なにわの顔” 9
- うまいもの通信® 10
- 新刊旧刊書評紹介 11
- まちかど 12

NO. 74

『農のあるまちづくり』を求めて

山口 繁雄

人口減少時代の都市環境

大都市地域の中心部では、既に人口の停滞や減少傾向が顕著になりつつある。

そうした中で、市街化区域内には相当量の都市農地が存在し、多くの地域では市街地と農地とが無秩序に混在している。

生産緑地法の改正に伴う「生産緑地」と「宅地化農地」との仕分けによって、都市農地のうちの生産緑地は当分のあいだ保全されることとなり、市街化区域内に農地が点在する状況は、しばらく続きそうである。

しかし、生産緑地といえども、必要な条件を満たせば行政に対して買取請求を行うことができるし、行政が買い取れなかった場合は宅地化市場に任されることとなる。

一方、宅地化農地を選択しても当面は農業の継続を希望する農家も存在するし、宅地化を希望しても急速に宅地化が進むとも考えにくい状況でもある。

このような状況の中で、市街地と農地とが混在する都市環境が今後どのようになっていくのかは都市計画に携わるものとして大いに気にかかる問題である。

「農のあるまちづくり」論

都市環境の中で公園緑地の存在が重要な意味を持つということは、もはや誰しも納得のいくこととなっている。快適な環境、アメニティの高い環境づくりに「緑環境」は欠かせない。

しかし、都市農地を「緑環境」の一つとして認知する人は少ない。何故か？それは都市農地が緑環境としてはもうひとつ魅力がないからではないか。

そこで都市農地を「緑環境」の一つとして

位置づけ、都市農地の計画的保全策を工夫することによって快適な都市環境づくりを行おうとする提案が行われている。それが「農のあるまちづくり」論である。

したがって、この「農のあるまちづくり」論は、単なる「都市農地保全」論ではない。むしろ、都市環境づくりの中で都市農地を積極的に活用していこうという意志のあるものである。

農のあるまちづくりのキーワード

農のあるまちづくりのキーワードとしては、
○ふれあいのまちづくり

—— 農を軸としたコミュニティの形成

○美しいまちづくり

—— 農地と宅地の計画的配置

○安全なまちづくり

—— 農地も活用した地域防災計画の推進が上げられる。

一つめのふれあいのまちづくりとは、都市農地が存在することによって、農家は都市型農業を継続できるし、都市住民は市街地内に余裕を感じることができ、農家の庭先販売や振り売り等で新鮮な農産物を手に入れることができるということで、両者のコミュニティの形成が農のあるまちづくりを決定づけるということである。

二つめの美しいまちづくりとは、市街地内に宅地と農地とがうまく配置され、都市農地自体が公園緑地に準ずる都市内の緑環境として機能することによって農のあるまちづくりが目に見えるものになるということである。

三つめの安全なまちづくりとは、阪神大震災でも明らかになったように、都市内のオー

プンスペースはきわめて重要な役割を果たすものである。都市農地はその都市内オープンスペースの一つとして位置づけられるものであり、そうした点でも農のあるまちづくりは大きな役割を果たし得るものであるということである。

農のあるまちづくりの方策

【その1. 農を通じてのふれあい対策】

○食を通じてのふれあい対策

食を通じた農家と消費者との交流・ふれあいについては、既に「振り売り」「有人・無人直売」「朝市」等の多様な市場外流通による交流、「農業祭」や「フェスティバル」等を通じた一時的交流、家庭生ごみの堆肥化による有機農業への活用を通じた交流等、多様に展開されている。

これらの交流・ふれあい活動をいっそう促進し、農家と消費者とのコミュニティを強めていく必要がある。

○緑環境を通じてのふれあい対策

農の持つ緑環境としての機能を活用して、市民農園（体験農園、福祉農園、学童農園等を含む）や農業公園を整備して、農家と農園利用者とのふれあいが進められている。

今後は、多様な市民農園や農業公園等を整備し、ふれあい対策を充実していくことが求められている。また、農のあるまちづくり自体への参加（計画、整備、維持管理）を促進していく必要もある。

【その2. 美しいまちづくり対策】

○宅地と農地との土地利用調整

都市農地を緑環境の一つとして位置づけ、市街地整備の中で宅地と農地との適切な再配置等を行い、双方の基盤と環境の整備を推進していく必要がある。

ここで問題になるのが、宅地と農地との土地利用の調整と整序がどの程度可能かという

点である。

この点については、都市農地の分布状況によって異なる。都市農地の分布状況は大別すると「集団型」「分散型」「小規模点在型」「孤立型」等にタイプ分けできる。

集団型の場合は、そのまま保全するか、ある程度の土地利用調整と基盤整備を行って保全するような方策が必要である。

また、孤立型の場合は、個別的に保全方策を検討していく必要がある。

難しいのは分散型や点在型の場合である。原則的には、宅地化農地と生産緑地等を含む地区について、土地利用調整と基盤整備を行っていくことが望まれるのであるが、一般の土地区画整理事業では減歩率が高くなるということから、なかなかそれが進まないという悩みがある。

そうした事態を解消するために「緑住区画整理事業」（ミニ区画整理事業）が制度化された。これでいくらかは減歩率の逓減はできるようになったが、農地基盤整備に比べるとまだ減歩率は高くなるために地権者の合意形成が困難になっているケースが多い。

そこで、農地基盤整備を主目的とした減歩率が少なく済む新しい基盤整備システムを開発していくことが求められている。

例えば、農地基盤整備事業による集団農地の整備・保全とともに、市民農園の確保・整備、宅地の計画的整備等を一体的・総合的に行う新しいまちづくり事業制度を創設していくことを考える必要があるように思われる。

○緑空間としての農地の活用

美しいまちづくりを推進していく上で、公園緑地とともに、都市農地を緑空間の一つとして魅力あるものにしていく必要がある。

その方策の一つとして魅力的で美しい「市民農園」や「農業公園」をつくりだしていく

こと、都市農地自体の美化等が上げられる。

これまでつくられてきた我が国の市民農園は、ヨーロッパのそれに比べると、きわめて貧相でお世辞にも美しいといえるものではなかった。最近、いくらかそうした点に配慮したものがつくられつつあるが、ヨーロッパに比べるとまだまだの感である。

また、市民農園は、「農地型」以外に「庭園型」も考えられる。ヨーロッパには目のさめる程美しい庭園型市民農園もつくられていることからすると、わが国でもそうしたものをつくりだしていく努力を強めていく必要性を痛感する。

また、最近、神戸市等の取り組みに見られるように、大規模で魅力的な農業公園をつくる動きも出てきている。これについても、市街地内で実現していくような方策を検討していく必要があるように思われる。

都市農地自体の美化については、農地の境界部の美化、農地自体に環境形成作物を導入する等の方策が必要と思われる。

農地境界部の美化については、例えば、美しく刈り込まれた生け垣や美しくデザインされたフェンス等を設けたりすることが考えられる。これらの生け垣やフェンスは、一定の広がりごとに統一感が必要で、個々ばらばらに整備が進められるとかえって都市景観を悪化させるものとなる恐れがあるので気をつける必要がある。

農地自体を美しくするために景観作物を導



西大泉市民農園(東京都練馬区)

出典 月刊「アルパック」No.25 70ページ「アルパック」発行

入する方法は、一般に農地は大きな広がりを持つことから、都市景観に与える影響は大きなものがある。具体的には、菜の花畑やれんげ畑、ひまわり畑等の「お花畑」をつくる方法がある。

【その3. 安全なまちづくり】

阪神大震災の教訓から、安全なまちづくりについての関心が高まっている。そうした議論の中で、意外に都市農地の果たす役割に注目したものがほとんど見受けられない。

農業集落には、食料の備蓄機能を持つとともに、防火帯や非難所ともなる農地があり、また、井戸や用排水路、ため池等の水源があり、防災に役立つ多くの機能を有している。

これらの諸機能に着目して都市農地及び集落を、都市計画の観点から安全なまちづくりの実現に活用していくことが必要になっているように思われる。

また、先に見た市民農園も、災害時の避難に際して倒壊家屋等で避難路が塞がれたりした場合の代替避難路として、また一時避難地としての役割が期待されるし、大規模な農業公園は二次避難地として、場合によっては仮設住宅用地としても活用が可能である。

このように都市農地は、安全なまちづくりに相当に有効な役割を果たし得る条件を有している。そこで、地域防災に配慮したまちづくりを進めるための方策として、例えば小学校校区単位等で農業集落や都市農地等を組み込んだ「地域防災点検マップ」の作成を行うこと等を検討すべきと考える。

おわりに

上記の一文は、私も参画させていただいた「京都における都市農業振興の方向と方策」を検討する研究会の研究成果を踏まえたものである。

(京都事務所 やまぐち しげお)

ヨーロッパの産業活性化と大学・行政・企業事情

金井 萬造

はじめに

9月に日本福祉大学の丸山優先生と名古屋事務所の小竹君の3人で英国のマンチェスター、バーミンガム、オランダのデルフトの各都市を訪れた。

以前から産業博物館と適性技術（身の丈にあった技術）に関心を持っていてぶらり気楽なツアーであった。

マンチェスター市の科学産業博物館

ロンドンから、車窓にミルトンキーンズ駅周辺の産業団地を眺めながら、マンチェスターピカデリー駅の近くの科学産業博物館を訪れた。

博物館は、1830年に開通したマンチェスターとロンドンを結ぶ世界最古の鉄道駅を利用し、産業都市をテーマに14の展示場にわかれている。同館は広さ 2.8haで産業と都市と生活の関係を幅広く取り上げ動態保存を重視している。そこには、現在のコンピューター技術が、1810年の紡績機のジャガードから1830年の計算機そして、アナログ、デジタルとパンチングシステムを通じて発展してきた経過の展示物があるなど興味を引いた。

それらの要素は、時代時代で大きく変化してきているが、これらの技術革新が将来のマンチェスター市の産業振興のアイデンティテ

ィのよりどころとなりえるからである。

同市は過去に石炭、鉄鉱石の資源を活かして発展してきた。今回、市役所とマンチェスター大学が未来に向けて、人づくりと技術開発を進めている方向がみえたことは大きな収穫であった。

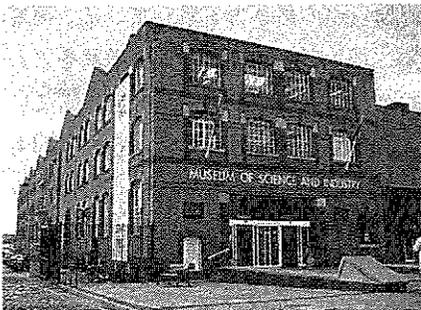
バーミンガム市の公的セクター主導による都市・産業おこし

バーミンガム大都市は、都市・産業活性化に向けて大転換をめざしていた。

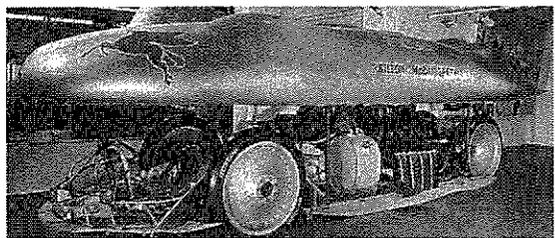
同市は古くから金属加工や機械技術にすぐれたものを持っており、産業革命期に河川や石炭の産地などの有利な立地条件を活かして製鉄業で産業発展をとげてきたが、最近は、工業都市から集客交流産業都市への脱皮を図っている。産業おこしの面では、市役所が大学と連携して研究開発と起業化の施策を展開しており、特に公的資金による開発助成、技術開発を商品化に結びつけるベンチャービジネス振興に積極的に取り組んでいる。

また、市経済開発局が主導して、アストン大学、バーミンガム大学と連携してアストンサイエンスパークや総合メディカルセンターを核とする産業団地開発を進めている。

さらに、基盤整備として空港、道路、鉄道、情報網の整備に取り組んでいる。



マンチェスター市
最古の鉄道駅を活用した科学産業博物館



展示物 昔のレーシングカー
出典 パンフレット



バーミンガム市
「工場都市よさようなら交流産業都市よ今日は」

一方、都市整備としては都心地区の再開発を進めており、1991年には会議場、シンフォニーホールを持った国際コンベンションセンターがオープンし、周辺には35,000ものベット数を有するホテル群、各種のミュージアム（金細工、木製品、ガラス、織物、産業機械、絵画等）とダウンタウンの機能が集客交流都市化を支援している。

大都市の衰退は依然進行しているが、これらの再活性化の取り組みから新しい発展の息吹が感じられた。

バーミンガム市を訪れ、産業と都市の活性化は、その都市のポテンシャルを活かしながら、公的セクターが主導して、研究開発から起業化までの一連の具体的な連携システムの定着化を図ることであるという基本線を再確認できた。

デルフトにみる適性技術による国際協力

オランダのデルフトでは、デルフト工科大学とオランダ応用科学研究所を訪れた。

大学では適性技術の国際協力センターのティス氏に話をうかがった。氏は1983年からプロジェクトごとに関係者を集めて研究グループを結成するなどユニークな国際協力を進めておられ、今は東アジアを担当されている。

現在はフィリピンの下水道など環境の4プロジェクトに関係し、5～6年かけてその地域にあった適性技術の定着化を図るために、カリキュラムの編成、研究内容の具体化、訓



デルフト市
運河のある市街地景観

練、施設計画を実施している。その一方で欧州の5大学や地元の研究者とのネットワーク化を進めている。

また、研究開発など事業資金は世界銀行、アジア銀行、EU、オランダ政府などから集めており、現在は資金、研究、成果を出すこと全てを管理している。

オランダ応用科学研究所では、リンツ氏に会い、大学と研究所と企業の連携による技術革新の取り組み状況をうかがった。

一般的に大企業と中小企業の連携は厳しいところがあるがデルフトではこれらの連携を積極的に進めているとのことである。

同市では、世界的、全国的レベルでの連携が進められていることが分かったが、今回は地方の都市での取り組みは十分に把握できなかった。

おわりに

地域産業の空洞化が進む中で、産業および都市の活性化は今後のまちづくり大きな課題である。バーミンガム市の公的セクター主導の対応は一つのあり方を示している。再度、バーミンガム市を訪問し、関係機関をまわり、より総合的な情報を把握したいと思っている。又、米国のピッツバーグ市など他の事例も学び、日本の産業活性化施策に活かしていきたい。

（大阪事務所 かない まんぞう）

世界夜景会議に参加して 中川 天晃

■なぜ夜景

明かりの歴史は人類が火を発見した50万年前にさかのぼる。

その火が明かりとして機能するのは、BC 3000年のロウソクの発明であり、はじめに求められた機能は、イギリスで家主に課せられた門前でロウソク設置義務、つまり防犯機能がその主目的であったとか…。

今やその明かりは、24時間絶えることなく世界で輝き続け、ボーダレスな生活スタイルを産みだし、その機能も明かりが必要な場面での単一的機能ばかりでなく、夜間における情緒的な空間演出といった側面が求められるようになってきている。

また、一方でエネルギー問題をどう捉え、これからの夜間照明に活かしていくのかと言ったことが今後の大きな課題となってきている。

去る9月7日～8日、大阪市主催による世界夜景会議がホテル・ニューオータニ大阪で開催された。

この会議は夜景を通じ、これからの夜と光のあり方を「景観」「生活」「共生」をテーマとする3つのセッションで紐解こうという趣向であったが、初日に参加したセッション

1「景観」を中心に報告する。

■夜景先進国のカウンターパンチ

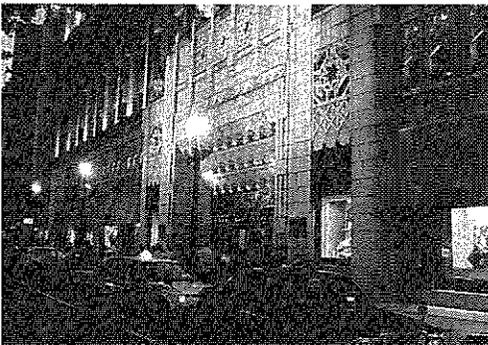
セッション1では、ウェストミンスター（トラファルガー広場）、ルクセンブルグ、リヨン、大阪ウォーターフロント、函館等の夜景事例を交えて進められ、中でもウェストミンスター市計画局長スポール氏によるトラファルガー広場照明計画が印象的で「戦略が必要である」の一言に行政マンとしてのプロ意識を痛烈に感じた。

また、明快な都市計画が夜間照明の面的広がりやを容易にし、夜の空間演出を豊かにしているパリの事例。リヨンのように小さなものから一つ一つ大切に柔軟に取り組み、コミュニティがプロセスから参加することによって、まちぐるみの夜景づくりに成功している事例等々、欧州夜景先進国の様々な取り組みを見せつけられた。

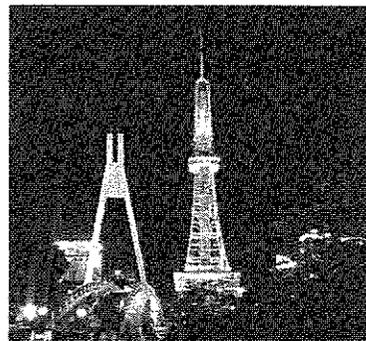
この時点で、都市計画が都市の空間演出を大きく左右することをあらためて実感するとともに、「歴史がない」「パブリック意識がない」「遊び方を知らない（オリジナリティがない）」この3無の状態が日本の夜景に対する現状（ひょっとすると全てにおいて!?)かと率直に感じ、この解決の糸口をセッション1後半に期待した。

■一つの大ヒント

やりすぎない積極さと市民が本当に思うことが必要だと指摘する一方、自己規制の



心齋橋丸(大阪市)のライトアップと
石井幹子氏のデザインによる街灯



名古屋ライトアップ計画(名古屋事務所)

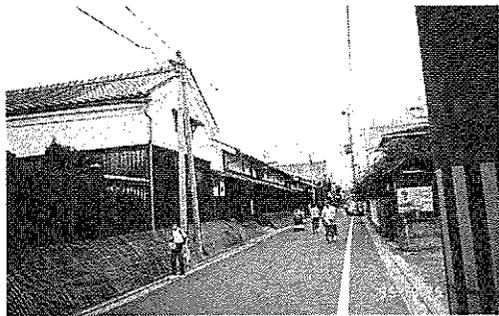
きかないのが日本人だと安藤忠雄氏。(夜はブラブラしなさい!とも言っていた)

美しい明かりに対し醜い明かりを消していけるかをみんなで考えたいと石井幹子氏。

しかし、スポール氏のこの言葉がこれからの日本人、自分自身にとっても最も必要と感じた。

「自分達の感情を表現することが大切、最後はみなさんが決めること」

(大阪事務所 なかがわ てんこう)



酒蔵の町並み



酒蔵を改装した地ビールのレストラン

ふるさとの味はほろにがさ?

小阪 昌裕

“ふるさと”とは

低成長の時代のせいか自分自身が歳をとったのか、“ふるさと”という文字をよくみかけます。まちづくりでも、“ふるさと”への愛着や誇りについての話が多いようです。

よく他のまちの“ふるさと”の議論をしますが、自分自身にとってはどのようなものなのでしょう。



伏見城(ふしみじょう)



伏見酒(ふしみざけ)



伏見人形(ふしみにんぎょう) 豊臣秀吉(とよとみひでよし)



地元の伏見大手筋商店街の一角にある“大手筋からくり時計”に毎時報時に音楽とともに出演しているキャラクターマーク(全部で11マークあります)

私は、京都市の伏見がそれに当たります。伏見は、お城の町、川の港町、お酒の町等々、いろいろな顔を持っています。その中で視覚的なシンボルは伏見桃山城(自宅からも少し見えます)と思います。

歳をとるごとに生活・行動圏が広がっていく反面“ふるさと”への想いは稀薄になっていったようです。ところが、ある時期を過ぎるとなぜかわが家から自転車距離の身近な町が気になりだしたのです。考えてみれば結構いろんな魅力がある町で、よく他のまちづくりで使ってきた言葉のうちの一つである“身近な資源の掘り起こし”を無意識に自分でしていたようです。

身近なふるさとの魅力を再発見

そんな気分、さらに拍車をかけてのは、酒造会社が地ビールレストランをオープンしたことです。レストランは、酒蔵を改装したもので地ビールブームと重なって開店当初から大賑わい。まちの視覚的なシンボルも大切ですが、やはり“花より団子”。人を連れていって楽しめる場ができたことは、何か

心強く、そして気分の良いものです。

決して目立つ場所ではないのに、自分にとってお城と同じ様なシンボルができたようです。

話題となり自慢もできるものができる、こんなに“ふるさと”への見方がかわるのか、他のまちづくりで言ってきたことをまさに実感したようです。この大切な“味”の体験をこれからのまちづくりにも活かしていきたいと思っています。

(大阪事務所 こさか まさひろ)

天王寺に新しい“なにわの顔”

藤井 明美

大阪市の南部に位置する天王寺に9月14日『天王寺ミオ』がオープンしました。

JR大和路線と廃線になった南海電鉄天王寺支線の跡地を利用して、JR西日本と南海電気鉄道などの出資による天王寺ターミナルビル(株)が駅の路線上空に建設した大型商業ビルです。ビル形態の専門店街としては、西日本最大といわれています。

12のフロアには、ファッション、グルメ、音楽、英会話スクール、エステティック等々250もの個性的な店が入居しています。1店1店のスペースが広いのでとても見やすく、パウダールームやレストコーナーもあり、ゆったりゆっくりショッピングができそうです。また、各フロアが、パステル調のトーンでまとめられているのでショッピングの疲れはあまり感じさせないような気がします。

6・7階には、2層の吹き抜けがあり、10階にあるライトガーデンは自然光が降りそそぎ、都会のオアシスといった感じがし、ほっと一息つける空間です。

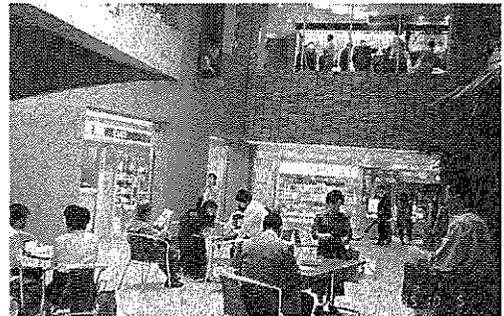
10・11階のレストランフロアからは、なにわのシンボル通天閣がすぐ目の前にみえます。12階にはホールが設置されており、セミナーや展示会等に利用できます。

とにかく、衣・食・住・遊・知…生活全般をとらえた新感覚のライフファッションビルといった感じです。いわば天王寺という若者が集まる地域性を活かしながら、最近の若者の流行を全て、ワンパックにしたようなビルです。(ただし、個々の店の規模、内容は大阪一番店でなく二番店で統一)

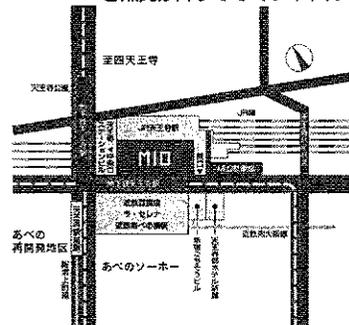
ビル周辺は、新感覚とは逆に、路面電車が走り、古くから続く店や街並みが今も残っていて、とても庶民的な大阪の下町といった風情で、歩くだけで懐かしい感じがします。古き良き時代の香りを残しつつも、もっと新しくしようとする不思議な街だなあと感じます。

10月12日には、大阪駅前ダイヤモンド地下街“ディアモール大阪”がオープンし、キタにも新しい顔が登場。どちらも目の離せないスポットになりそうです。

(大阪事務所 ふじい あけみ)



自然光が降りそそぐライトガーデン



出典 パンフレット

うまいもの通信 ⑯

海の贈り物
中西 由起

真夏のできごと

猛暑の中、店頭に並ぶ季節外れの牡蠣！？
牡蠣を目にすると、牡蠣喰いの私としてはついついつばを飲み込み、手がのびる。しかし、“牡蠣の季節はrの月だけ（5月～8月は食べてはいけない）”ということわざがあるように、牡蠣の旬は冬場であると信じ込んでいた。ところが、以前雑誌で「夏の岩牡蠣」が掲載されていた。その記憶を手がかりに、今夏はまず鳥取県まで出かけてみた。

鳥取県青谷町夏泊

盆あけとはいえ残暑はまだまだ厳しい。じりじりと照りつける太陽の下、目的地の夏泊海岸をめざした。駅からタクシーで行くのもいいけれど、夏の牡蠣を汗も流さず簡単に食べられるのではおもしろくない。夏を感じるためにも歩いて行くことにした。とは思ったものの徒歩30分はなかなかしんどい。

道中の風景は、灰色のイメージや油のにじんだ漁港といった山陰のイメージを一掃させる、青緑の透明な海と入道雲の浮かんだ空が夏を感じさせる。

岩牡蠣とのご対面

ようやく岩牡蠣が食べられる宿を発見！（到着ではなく“発見”とは何とないかげんな旅！）小柄なおばあちゃんに出迎えてもらい、行水、昼寝と1ラウンドする。それからおばあちゃんとしぼし歓談、そして目的の牡蠣とご対面。大きさは大人の手のひらほどもあると聞いていたが、冬場の大ぶりの牡蠣ぐらいでちょっと残念。

夏泊海岸では、7月の解禁から9月初めにかけて、海女さんが水深約13mまで潜って岩牡

蠣を採ってくる。今ではウェットスーツにフィン姿の海女さんなので、昔は10掻きで13m潜ったところを4掻きですむようになったそうである。山陰の海では、とてもじゃないが冬には潜れそうにもない。鳥取の夏牡蠣とは確かに理にかなっている。

さてさて、お味は

ぽってりした厚みのある身をほおばると、乳白色の濃いミルクのようなソースが口一杯に広がる。牡蠣喰いとしてはこれだけで酔いそうだ。ましてや冷酒となら…。しかし、今回は酔うほど食せなかった。というのも、最近では市場が土日に開かれなくなり、海女さんも週休二日になってしまったからである（その日は土曜日、品薄だった）。

さて、秋も深まり、先日広島での牡蠣の初水揚げのニュースを耳にした。今度は真牡蠣を堪能できる季節の到来である。京都の錦市場には鳥羽、鹿児島からの牡蠣が主に入荷するそうで、私としてはこれでほとんど年中、牡蠣を堪能できるとは嬉しい限りである。

（大阪事務所 なかにし ゆき）



手のひらサイズの岩牡蠣
ちなみに私の手はスモールサイズ



見た目はぶるるん、お味はまったり

新刊旧刊書評紹介

延藤 安弘 著

晶 文 社

『これからの集合住宅づくり』

紹介 堀口 浩司

本書の筆者はこれまで住宅や住宅地づくりを中心に、市民主体のまちづくりの現場を通じて、その重要性、必要性を指摘してきた人である。また、これまで外国の絵本の中のまちづくり教育や環境教育の要素を抽出して、「人が集まって暮らす」ことのルールや楽しさを紹介してきた人でもある。

本書はそのタイトルから想像されるような集合住宅の計画設計事例集(筆者曰く「ハコモノ本」)ではない、実際の住宅づくりの現場を通じて、そのプロセスにおけるさまざまな住み手参加の方法論や結果としての空間構成の豊かさを紹介している。

内容を紹介しますと、住み手参加の中での①公営住宅、②コーポラティブ住宅、③公共賃貸住宅の改善と建替え、④密集市街地での共同建替え、⑤もやい住宅「Mポート」(熊本市)など12の事例が紹介されている。この中では、集合住宅の物的なアイテムの紹介だけに止まらず、住み手と設計者、住み手相互の対話を通じて、個々の価値観、生活習慣、経済条件といった違いを克服して、一つの共同体をつくって行くプロセスが詳細にトレースされている。コーポラティブ住宅や住民参加による建替えの面白さは、居住者の個性や人間関係を表出した面白さであり、多様な要素を内包する住宅が、結果として独創的な生活空間となってゆく様子が紹介されている。住み手による住まいへの提案は、設計者や研究者の常識的な想定を超えており、優れた建築家の与える「空間体験の強制」とは一味も二味も違った「自らの空間創出」の例示となっている。

筆者自ら住み手として参加している「Mポ

ート」の例では、経済合理性を超越した「住まう」行為に対する強烈なメッセージが示されている。熊本という土地柄のもとではコープ住宅は

ヘタな戸建て住宅よりも費用が高く、マンションと戸建て住宅との比較の中では、「あえて、集まって住む」ということの強い動機付けが必要である。コストダウンを図るため、建替え予定の小学校の床材をみんなで剥がしに行く、住戸の場所を決めるため風船を上げて建物の高さを実感するなど、住み手も作り手として参加するイベントを通じて、自らの自己実現のプロセスを込めた熱気が伝わってくる。

私共が、Mポートを見学させていただいた折、筆者が「『もやい』の住宅づくりは、モノづくりじゃないんです。住み方、暮らし方、生き方の運動なんですよ。」とおっしゃられたのが非常に印象に深い。

これからの集合住宅づくりを展望して、「対話性」「多様性」「開放性」の3つのキーワードを掲げているが、これを都市や地域に置き換えても同様である。都市・地域づくりも市民・住民の参加や関わりを抜きにして、新しい展望を見いだしにくい状況にある。

本書は住宅の計画・設計者のみならず、都市や地域づくりに関わる者にとって、さまざまな示唆を含んでいる本である。

(大阪事務所 ほりぐち こうじ)



まちかど

昔よく見た風景

西村 研二

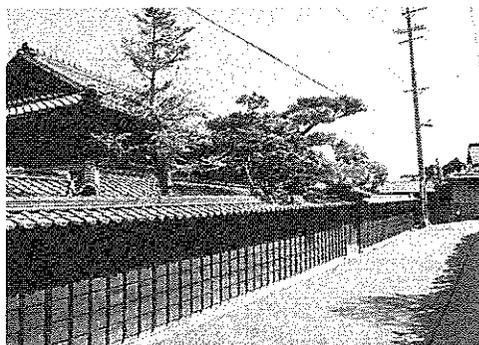
「まわるまわるよ、時代は回る。」と、中島みゆきは歌います。しかし、ふとしたことで時の流れからはずれる事が時々あって、今から紹介する愛知県知多市岡田はまさにそんなところなのです。

旧岡田村は江戸の頃から機織りと木綿晒しが盛んで、明治の頃にはいち早く自動織機も導入されるなどたいそうハイカラな村でした。当時は参道の脇にミルクハウルがあり、軒先に並ぶ真っ白な晒し木綿の通りは女工たちでたいそう賑わっていたそうです。それが公共交通整備の遅れから、いつしかこの町は時が止まったまま。

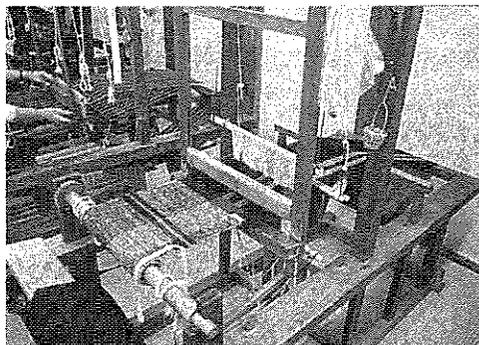
町のそこかしこには古い町屋が残っています。「この家は明治の中頃に建った。向こうのはその前やから明治の初めかなあ。あの歳なんかは明治元年にできたんやて。」と、道行くおばさんが話してくれました。

この町の本当の良さは建物だけじゃなく、昔の生活が未だに残っていること、それとまだあまり人に知られていないこと。一人か二人のふらり旅が似合う、岡田はそんなところなのです。

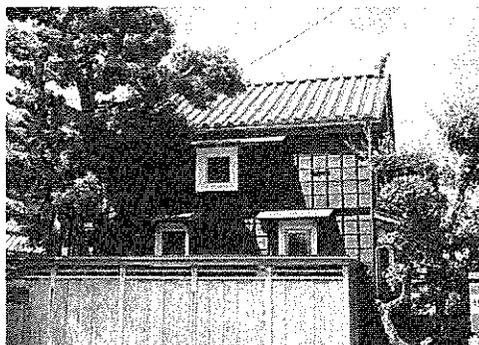
(名古屋事務所 にしむら けんじ)



このような風景がそこかしこにあります



明治元年の趣は今や機織り工房に



新築の家もこのとおり

アルパック (株) 地域計画建築研究所

- 本社
- 京都事務所 〒600京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F/TEL(075) 221-5132 FAX(075)256-1764
- 大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06) 942-5732 FAX(06)941-7478
- 名古屋事務所 〒460名古屋市中区丸の内3-18-30・ツボウチビル6F/TEL(052)962-1224 FAX(052)962-1225
- 東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401/TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
- (株)九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-1・日之出ビル6F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673
- (株)アルパックインターナショナル 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F/TEL(06)965-2012 FAX(06)965-2014
- (株)都市居住文化研究所 〒604京都市中京区東洞院通り上ル三文字町225・朝陽ビル4F/TEL(075)252-2231 FAX(075)252-4417